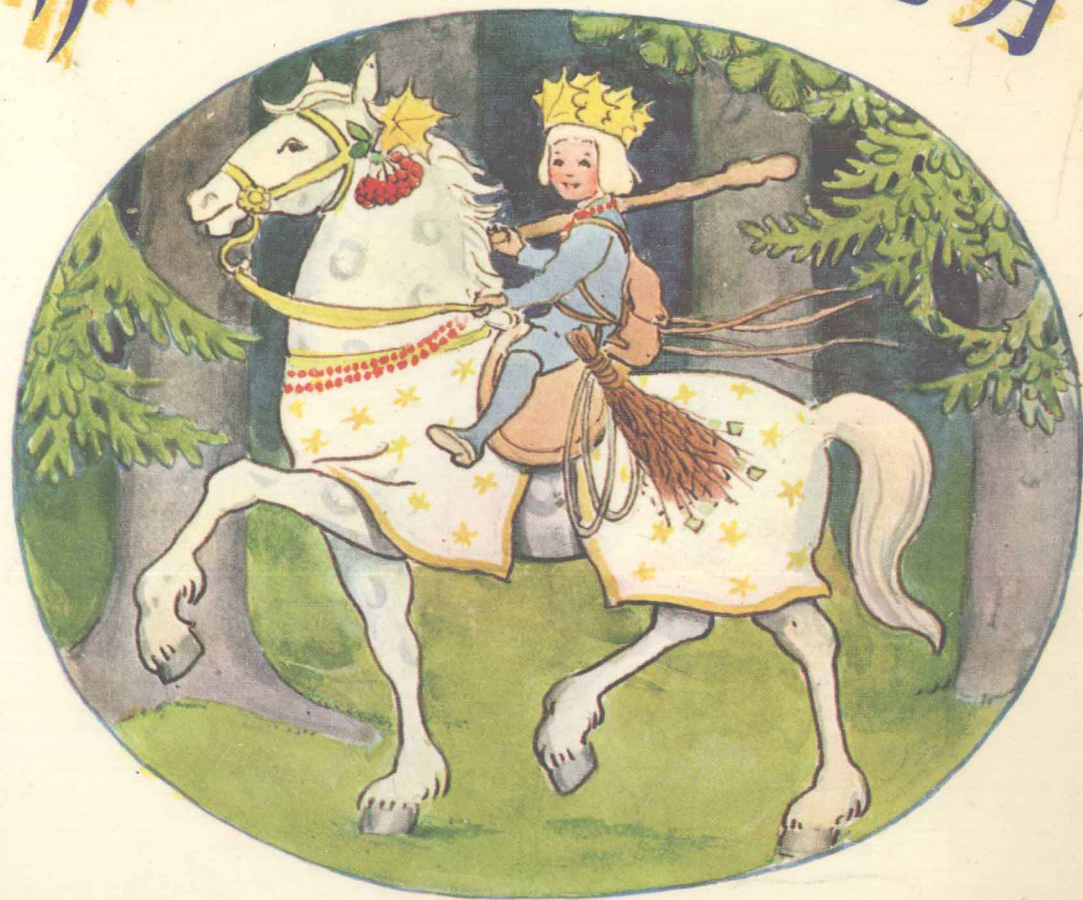


リローカ博士の発明



ベスコフ童話集

949

ベスコフ, エルサ

クローカ博士の発明(ベスコフ童話集)

小野寺百合子訳

佑学社 1982

126P 21cm

カバーデザイン 横山 京子

クローカ博士の発明 (ベスコフ童話集)

1982年 4月30日 第一刷発行

著 者 Elsa Beskow
訳 者 おの でら ゆりこ
小野寺百合子
発行所 株式会社 佑学社
代表者 三井数美
〒101 東京都千代田区猿樂町 2-3-1
電 話 東 京 291-6155~7
振 替 東 京 5-190823
印 刷 ヌーラル
製 本 徳住製本所

©1982 Yuriko Onodera

エルサ・ベスコフ作・絵

クローカ博士の発明

（ベスコフ童話集）

小野寺百合子訳

Elsa Beskows Sagor

by Elsa Beskow

©1981 Bonniers Junior Förlag AB, Stockholm

Published in Japan by Yugaku-sha, Ltd., Tokyo

Japanese translation rights arranged with

Bonniers Junior Förlag AB through Tuttle-Mori Agency

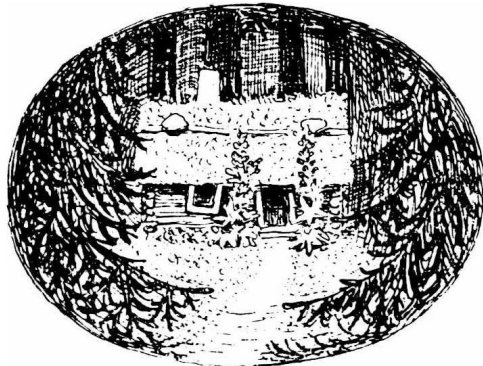
目次

森の中のお城^{しろ} 5

クローカ博士^{はかせ}の発明^{はつめい} 33

記憶^{きおく}をとりかえっこした王さま 65

格子山^{こうしやま}と縞畑^{しまばたけ} 105



森の中のお城^{しろ}



むかしむかし、ある大きな森のまん中に、古い城しろがたっていました。城のまわりの庭は、草ぼうぼうでした。城にはたいへん年とった城主じょうしゅと、たいへん年とった夫人と、二人の年より召使めしつかい——下男げなんのフェリックスとコック女のヨハ
ンナ——が住んでいました。

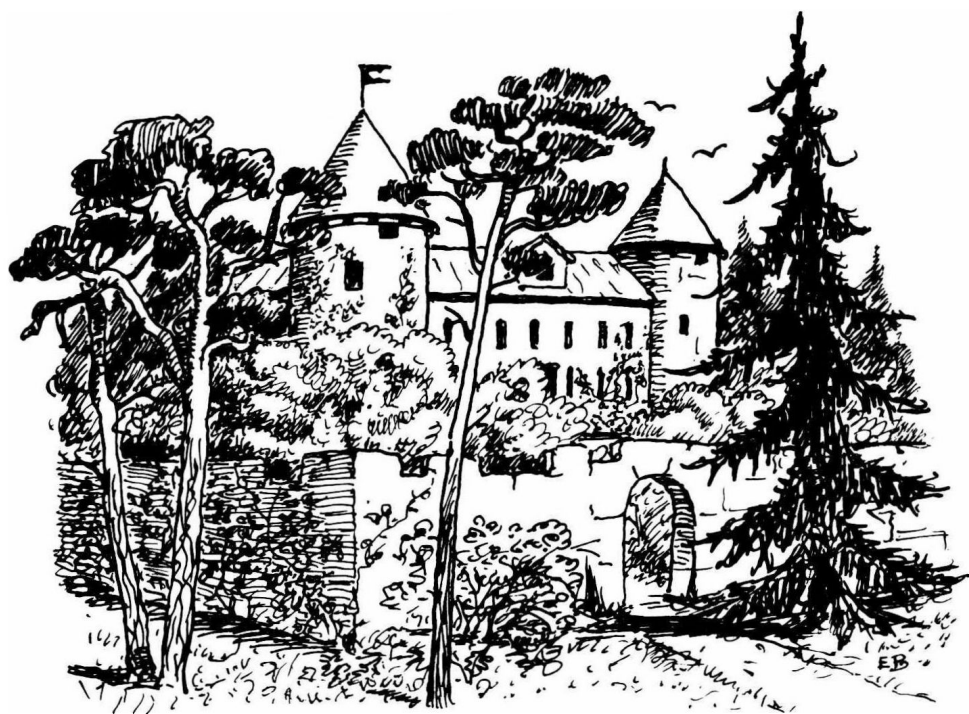
ある雨の夜、老夫婦らうふうふが大きな客間のだんろの前にすわって、庭の木々が風に鳴なるのを聞いていますと、突然とつぜん、城の大門をコツコツコツと三度たたく音が聞こえました。

「こんなにおそくだれでしょうね」と、老夫人がいました。

「うん、だれかな？」と、老城主もいって、「フェリックス、おまえちょっとおりていって、門のそばの穴あなからのぞいておいで！」と、命めいじました。

年より下男は、おりていきましたが、まっさおな顔で帰ってきました。

「ひとりの男が立っているのですが、まるで街灯がいでんのような背高せいたかのつぼです。黒



いぼろしをかぶり、大きな黒い
マントを着ていますが、全然ま
ともなものじゃありません」

そのとき、下の門でまた三度
たたく音がしました。

「ヨハンナ、おまえいって、何
かご用か聞いておいで！」と、

老夫人がいました。

年とったコック女はおりにい
きましたが、フェリックスと同
じようにまっさおになつてかえ
ってきました。

「あんなのっぽの男、あたしゃ今まで見たことはありませんね。おぼけかもしれ
ませんよ」

「その人なにかいったかい？」と、老夫人が聞きますと、

「ひとばんとめてほしいといいました。びしょぬれで冷えきっており、おなか
もペコペコだといっています」

「中へ入れておやり！」と、老城主ろうじょうしゅがいいました。

「でも、どろぼうかもしれませんよ」と、フェリックスがいいますと、老夫人
はたしなめました。

「きつとこまっているただの旅人たびとだろうよ。うちの中へ入れてほしいのだよ。
のっぽが何だね。だんなさまもわたしも、若いころは、かなりののっぽだったん
だよ」

「フェリックス、さあいつてあけておやり！」と、老城主はいいました。

「ひとりでいくのはいやです。どうぞおゆるしてください」年より下男はいいました。

「ヨハンナ、おまえついていっておやり！ あかりを持っていって照らしておやり！」と、老夫人は命じましたが、ヨハンナは答えました。「奥さまのお言葉ですが、いやです。考えただけでも背すじがゾッとします」

「バカをいうんじゃないよ、ヨハンナ。それじゃわたしがついていってあげよう。わたしはコシヨウのびんを持っていくよ。はたしてそれが、おそろしいものだったら、くしゃみをさせてやりましょう」

すると老城主もいいました。「おれは、ステッキを持っていくよ。さあ行くう！」

そうして四人は一列になつて歩きだしました。先頭は、大きな重い門の鍵を持った下男、次はろうそくを持ったヨハンナ、それから手にコシヨウのびんを



持った老夫人、最後がステッキを持った老城主ろうじょうしゅめでした。

四人は長い階段かいだんをおりていって、大きな暗いげんかんにつき、年より下男は鉄の鍵かぎを鍵穴あなにさしこみました。すると重いかしのとびらは、ギーと音をたててあきました。



外には、のっぽでやせっぽちの人が立っていましたが、なるほど、あやしいものに思われました。その人がげんかんにはいつてきたとき、大きなぼろしと黒いマントから

は、たきのように雨が流れおちていました。

「この人の足はフラフラしているようだよ。これはたしかにまともなものではない」老夫人は考えて、コシヨウのびんをにぎりしめました。

また、老城主ろうじょうしゅはこう考えました。「こんなのつぼの人の顔が、どうしてこんなに小さいのかな？」

けれども、フェリックスとヨハンナは、何も考えることもできないほど、こわくてブルブルふるえていました。

「こんなにおそくおじやまして申しわけありません」と、その変へんな人は低い声でいって、長いマントの前を少しはだけました。すると、ヨハンナはおどろいて、アッとさけぶなりろうそくを落としてしまいました。あかりはゆかに落ちると消えました。ヨハンナは、のっぺの人のむねのあたりに、もうひとつ顔のあるのをはっきりと見たのでした。



老城主^{ろうじょうしゅ}は、フェリックスにすぐろうそくをつけるように命^{めい}じました。それがないへん手間^{てま}どったのは、フェリックスが何度も何度もくしゃみをしたからです。老夫人がそのまともでないものに向かって、コショウをかけようとして、まちがってフェリックスに向かってかけてしまったのでした。

しかし、やっとうろそくがつきますと、そこに立っているのは、お婆けでも何でもないことが、どうやらみんなにわかりました。それはあたりまえの人間の男で、子どもとのふたり連れでした。男は頭^{びく}を低く下げ、みんなをおどろかせたことをあやまりました。子どもが長旅^{ながたび}であんまりつかれたので、この男は子どもを肩^{かた}にのせ、雨が当たらないように自分のぼうしをかぶせ、マントを着せていたのです。

老城主は、フェリックスのおどろいた顔があんまりおかしくてふき出してしまいました。それで、フェリックスも、やたらにくしゃみをしながらもわらい

出しました。それがどろぼうでもなく、おばけでもなかったのがとてもうれしかったのです。

ところが、ふらふらになって立っていた男の子が、とつぜん、声も出さずにゆかの上にたおれました。

すると、老夫人があわてていいました。「手をつかねて立っている人がありますか！ ヨハンナ！ この子が気を失ったのが見えないのかい？ おまえとフェリックスで、すぐにこの子を黄色の客間に運んで、ベッドにおねかし！ ヨハンナ、タイルストープにちゃんと火をおこすんだよ。それから、おとうさんのためにもベッドをつくって、何か食べる物をあげなさい。せつせとするんだよ」

「そうだ。せつせとしろよ」と、老城主もつけくわえました。

フェリックスとヨハンナは、いいつけられたとおりにはしましたが、こんな